

こうした武蔵野の農村へ、東京の膨張によって都市的施設が進入してきた。その場合、新施設は古い集落をさけて、その中間にくいこんでいくことが多い。これは都市的施設のために農村が土地を手ばなす場合、一般に農家の宅地や耕地をのこして、農村の中間にある山林から先に手ばなしていくためである。そこはもと薪炭や堆肥用の草刈場で、耕地にくらべれば農業上の重要度は少なく、他方進出する都市側にとっては、地価が比較的安く、広くまとまった土地を得ることができる。

このため山林部から都市化がはじまるわけである。たとえば、青梅街道五日市街道にそって古い新田集落があり、そのたんざく型地割の背後にある山林地へ、小平学園町や旧陸軍施設が入り、現在後者は小平団地や建設大学校などになっている。五日市街道と泉集落の間や、青梅街道と谷戸集落の間にも、旧軍施設が入り、現在は大学や工場などに利用されている。泉集落と甲州街道の間にも、東芝工場、多摩霊園などが入っている。

こうして旧農村と都市的施設が交互にあらわれ縞状の配列を示すようになったのである。つまり、このような新旧集落の配列や土地利用の現在に、かつての武蔵野の開発の姿がのこっているといえよう。

武蔵野に住み、周囲を歩いているうちに、私は以上のことを考えてみた。地域にあらわれた現象の中から、これを系統だて、一つの理法を求めていくことが、地理の研究法の一つではないかと思うからである。

悲 愴 交 響 曲

別 技 篤 彦

A大尉は私がジャワにいたとき親しくつきあっていていた将校である。彼は美術学校（今の芸大）出の新進の洋画家であった。少尉で召集された彼は開戦以来ジャワ派遣軍の軍司令部の参謀部に所属し、その特殊な技能を買われてインドネシアの芸能人相手の文化工作に一役買っていたのである。彼がいかめしい軍服をつけた姿はほとんど見たことがない。いつも開きんのスマートな防暑服を着て、それには階級を示す畧章さえつけられていなかった。眼にはいつもやさしい光が漂っていた。

彼はその所属の関係から、戦局全体の推移についても明確な判断をもち、1945年8月の原子爆弾の投下、それに伴う終戦交渉の進行などの情報もいち早く私に知らせてくれた。終戦によってこの南海の島に孤立した日本人の間には大きな動揺が生じたが、彼は早く復員して再び自由にカンヴェスに向うことができるのが何よりの喜びであった。彼は毎日のように私の家に来ては時間を過していた。「ひとつ音楽でも聞いて心を落ちつけよう」と彼はいい、私の家に保管してあるオランダ人から接收したレコードのアルバムをさがしていたが、その中からある一冊を引き出し、眼を輝かせてこういった。「こ

れに今こんなところでお目にかかれるとは思わなかった”。

それはチャイコフスキーの交響曲第6番“悲愴”であった。私たちはそれに聴きいった。病的なまでの感情の鋭どさ、短音階の効果的な使用、旋律の豊かさと管弦楽法の精妙さは、このシンフォニーに何かそくそくとして人に迫るような気分を生み出させる。“いつ聞いても悲愴はいいなあ。実はぼくはこれについて深い思い出があるのだ”。

彼は輸送船に乗せられるとき、行李の中に絵の道具一式とともにこの“悲愴”のアルバムを一冊しおばせてきたのである。そしていよいよ明日はジャワ上陸作戦という前夜、輸送船の食堂の一隅でそれをゆっくり眺めたのであった。“明日の戦いでは死ぬかもしれない。しかしせめてその前にもう一度、自分の生命である芸術の世界に沈潜したかったからだ”と彼はいった。予想通り、翌日の上陸戦は激烈をきわめ、彼の乗船桜丸はオランダの魚雷艇に撃沈された。彼は重油の漂う海を泳いで辛うじて助かったが、レコードは勿論ジャワ海の底深くに消えてしまったのである。

私はこの話を異常な感動を以て聞いた。昔の教養のある武士は、よく戦いの前にかぶとに香をたきこめたり、えびらに花をさしたり、あるいは歌を作ってひそかな感慨を托したもののだが、これはまさにそれにも似た心である。死の世界の入口に立たされたとき、彼の支えとなったのは、ただ教養・芸術を愛する若い心だけであった。私はそれ以来一層A大尉が好きになったのである。

彼にはジャワで愛した混血人の女性がいた。いずれ日本へ帰ったら結婚するのだといていた。その女性には私も会ったことがある。“乱暴者ばかりだといひふらされてきた日本の将校の中にこんな人がいたのには本当にびっくりしました”と彼女はいった。しかし運命は残酷である。A大尉はジャワに在任中、3カ月ほどオランダ軍の捕虜をつれてチモール島へ工事に派遣された経歴があったばかりに、戦犯として告発された。自分が助かりたいため、彼に不利な証言をした部下の軍曹を恨むこともなく、無実の罪を一身に負って彼はジャカルタで刑死したのである。

私にはなぜかこうしたゆかしい、いわば“文武の道”に秀でた日本人が、年ごとに少なくなっていくような気がして残念でたまらないのである。

大 学 と 地 域 社 会

有 末 武 夫

私の勤務先である群馬大学教育学部が、このたび前橋市の中心部に近い日吉町から、北部の荒牧町へ移転をした。群馬という地名は、古く牧場に放たれた馬のむらがる所から出たといわれるが、利根川の左岸、国道17号線沿いの荒牧の地も、かつてはそのような土地柄であったのであろう。広々とした環